

高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

つづきじょうあと
筑城城跡



1999. 10

高松市教育委員会

はじめに

中世の高松を語るうえで欠かせない人物として、香西氏をあげることができます。香西氏は、今の鬼無・香西周辺を本拠地として活躍した武将でした。讃岐国守護であり、室町幕府の管領であった細川氏に仕え、さらに三好氏に仕えていたため、香西氏の活躍は讃岐のみならず、畿内においてもめざましかったことが古文書などからうかがえます。

さて、この香西氏に仕えていた武将に筑城氏がいました。筑城氏は、今の鶴市町周辺を本拠地として活躍していたと伝えられ、弦打小学校北側の集落周辺に「城尾神社」「上の門」「下の門」といった地名が残ることから、この付近に筑城氏の城があったのではないかと想定されていましたが、今回、小学校東側に所在しています弦打公民館改築に伴う発掘調査により、筑城城と同時代頃の井戸や土器、念持仏が発見され、城に關係する遺跡が明らかになりました。

発掘調査は、市民の方々の大きな関心を呼びました。地元の方々や関係者の努力により、新しい公民館の一角に井戸跡を復原して残すことができ、また土器や念持仏も公民館にて公開されています。本市の郷土学習の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々や関係者に感謝の意を表するものです。

平成11年10月

高松市教育委員会

教育長 山口 審式

例　　言

- 1 本書は、高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市鶴市町に所在する筑城（つづき）城跡の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　讃岐文化遺産研究会
弦打公民館建設推進委員会
- 4 本遺跡の調査は、試掘調査を平成9年6月30日に文化振興課文化財専門員山元敏裕が行い、本調査を平成9年7月8日～8月15日まで同文化財専門員山本英之が行った。整理作業は、山本および同文化財専門員川畠聰が行った。
- 5 本報告書の執筆・編集は、調査担当者である山本協力のもと川畠が行った。また、本文の一部は、山本作成の現地説明会資料を引用した。
- 6 本文の挿図として、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」「五色台」「白峰山」および高松市都市計画図2千5百分の1「鬼無」を一部改変して使用した。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 8 挿図および本文中の方位は、磁北を表す。
- 9 土色の表記については、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』によった。
- 10 本書で用いる遺構の略号は、次のとおりである。

S D…溝　S E…井戸　S K…土坑　S X…不明遺構

目 次

はじめに

例 言

日 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と層序	6
第2節 遺構と遺物	11

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷	23
第2節 筑城城について	25

図版目次

図版1－1 調査前全景

図版1－2 調査区西壁土層堆積状況（SD14付近）

図版2－1 調査区全景（南から）

図版2－2 SD04遺物出土状況

図版3－1 SE01全景

図版3－2 SE01井戸検出状況

図版4 士師質土器小皿・杯、中国産青磁碗、龜山焼壺、銅錢

図版5 十一面觀音念持仏

挿図目次

- 第1図 調査区位置図
- 第2図 周辺主要遺跡分布図
- 第3図 噴砂検出状況
- 第4図 遺構配置図
- 第5図 調査区西壁上層図
- 第6図 SD01・02出土遺物実測図
- 第7図 SD03出土遺物実測図
- 第8図 SD04出土遺物実測図
- 第9図 SD10出土遺物実測図
- 第10図 SD13出土遺物実測図
- 第11図 SD14出土遺物実測図
- 第12図 SE01出土遺物実測図
- 第13図 SE01平面および断面図
- 第14図 SE01南西およびSD13・14切合付近出土遺物実測図①
- 第15図 SE01南西およびSD13・14切合付近出土遺物実測図②
- 第16図 SK01出土遺物実測図
- 第17図 SX01出土遺物実測図
- 第18図 第5～6層出土遺物実測図①
- 第19図 第5～6層出土遺物実測図②
- 第20図 遺構変遷図（第Ⅰ期）
- 第21図 遺構変遷図（第Ⅱ期）
- 第22図 筑城城跡周辺図

挿表目次

- 第1表 SD01・02出土遺物観察表
- 第2表 SD03出土遺物観察表
- 第3表 SD04出土遺物観察表
- 第4表 SD10出土遺物観察表
- 第5表 SD13出土遺物観察表
- 第6表 SD14出土遺物観察表
- 第7表 SE01出土遺物観察表（上面精査時）
- 第8表 SE01出土遺物観察表（埋土掘削中）
- 第9表 SE01南西およびSD13・14切合付近出土遺物観察表
- 第10表 SK01出土遺物観察表
- 第11表 SX01出土遺物観察表
- 第12表 第5～6層出土遺物観察表

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

筑城城跡は、中世に高松で活躍した武将香西氏に仕えた筑城氏の居城として、古くから知られています。江戸時代後期に編纂された『讃陽古城記』や『讃岐國名勝図会』にも記述が見られます。その該当地として、鶴市町にある城尾神社（荒神社）を中心に200m四方が推定されていた。

平成9年に高松市教育委員会教育部社会教育課より、弦打公民館を北隣接地に改築するにあたって埋蔵文化財の照会が同文化部文化振興課にあった。同地は、筑城城跡推定地の南に隣接するため、埋蔵文化財が発見される可能性が高いと判断された。両者協議の結果、文化振興課が試掘調査を実施することで合意した。平成9年6月30日に試掘調査を実施し、中世の溝跡や土器といった埋蔵文化財を確認した。これを受け、両者再協議が行われ、文化振興課が発掘調査を実施し、発掘調査にかかる費用は社会教育課が負担することで合意した。

平成9年7月8日から8月15日の間、文化振興課文化財専門員が発掘調査にあたった。調査期間中の8月3日には弦打公民館協力のもと現地説明会を開催し、地元をはじめ多数の市民の参加を得るとともに、地元では筑城城跡に対する関心が高まっていった。こうした中、社会教育課より調査の成果を新しい公民館に反映したいと要望があり、協議・調整を重ねた結果、調査で検出した井戸跡を保存・復原することになった。調査終了後、井戸跡を埋めて保存を図るとともに、公民館敷地内にこの井戸を復原展示している。さらに、出土した遺物の一部を公民館で陳列ケース内にて展示し、来館者が見学できるように努めている。

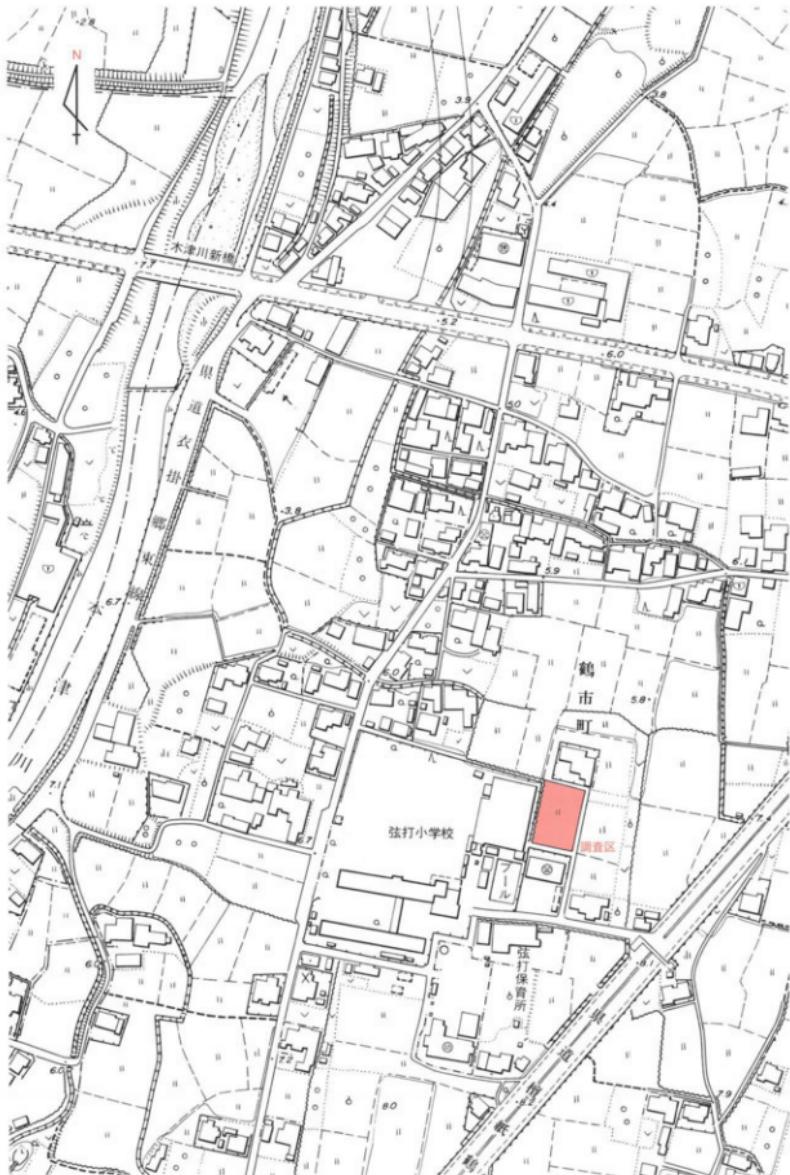
報告書作成に必要な整理作業は、調査終了後、文化振興課で随時行った。

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成9年7月8日より開始した。調査は、建造物建設範囲を造構面まで全面機械掘削した。その後、造構検出作業を経て、適宜造構掘削を行った。8月15日に井戸跡（S E 01）の写真撮影を行い、調査を終了した。なお、調査の詳細は、次の調査日誌（抄）のとおりである。

調査日誌（抄）

- | | |
|------|----------------------|
| 7月8日 | 機械掘削開始 |
| 9日 | 器材搬入 |
| 22日 | 造構面精査中に念持仏出土 |
| 24日 | 造構掘削開始 |
| 8月3日 | 現地説明会を開催 |
| 5日 | 全景写真撮影、器材撤収 |
| 6日 | 造構平面実測 |
| 15日 | S E 01を実測・写真撮影し、調査終了 |



第1図 調査区位置図 (縮尺1/3,000)

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており、そのため侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ビュート）となっている。西側の五色台は、平坦な頂部をよく残しており、屋島もまた同様に解析から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれより解析が進んでおり、紫雲山・白山・由良山など多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

高松平野は、これら侵食が進んだあと、沖積世に入ってから堆積されて形成されたもので、讃岐山脈から流下し、北へ流れ瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって搬送された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。

当該地は、この高松平野の北西部に位置し、香東川と本津川がもっとも接近する部分にあたる。西は約200mで木津川の旧河道に、東は約400mで香東川に至る。一方、北側は約300m離れた地点から北に向かって急激に標高を減じており、東西北の三方に向かって見通しの利く地形となっている。

第2節 歴史的環境

筑城城跡が所在する高松平野西部で、もっとも古い人類の歴史が刻まれているのに、中間（なかつま）・西井坪遺跡がある。この遺跡では、旧石器時代後期に属する石器群が見つかるとともに、鹿児島湾北半にあたる姶良カルデラが大噴火して降ったAT火山灰の堆積層も確認されている。次の縄文時代では、鬼無藤井遺跡で川跡から晩期の土器片が出土している。

稲作が始まる弥生時代では、まず鬼無藤井遺跡において前期の環濠集落が出現する。この集落は、二重の環濠を巡らし、最大径約70mの規模をもつ。弥生時代中期の遺跡は未確認で空白を生じる。後期になると、西打遺跡で竪穴住居や掘立柱建物跡を、中間・西井坪遺跡では掘立柱建物跡や土器棺墓が確認されている。

古墳時代になると、高松平野でも古墳の築造が顕著になる。石清尾山塊では、前期初頭の鶴尾神社4号墳を皮切りに前方後円墳や双方中円墳といった積石塚が出現する。積石塚は、尾根頂部や山頂に累々と築造され、全長100m近くを測るものも現れるが、中期中頃には、その築造は終焉するようである。一方、平野西部では、中間・西井坪遺跡で前方後円墳を含む前期古墳の周濠が3基確認されている。中期になると平野西部で最大規模をもつ全長60.5mの前方後円墳・今岡古墳が築造される。ほぼ同時期、中間・西井坪遺跡では埴輪や陶棺を製作・焼成していたことが知られており、ここで製作された陶棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期初頭になると、それまで山塊や丘陵部のみだった古墳の築造が、平野にも見られるようになる。筑城城跡の南わずか500mに位置する相作（あいさこ）牛塚古墳は、後期初頭に築造された古墳で、挂甲（けいこう）や金銅装の馬具を副葬していた。

古墳時代後期後半では、平野縁辺部の丘陵において横穴式石室を主体部とした群集墳の築造が盛んになる。先の石清尾山塊でも横穴式石室墳が見られるほか、山塊南の淨願寺山山頂付近では小規模な横穴式石室墳が密集している。一方、平野西縁辺に位置する平木古墳群や古宮古墳周辺では、大型の横穴式石室墳が点在している。



第2図 周辺主要遺跡分布図（縮尺1/30,000）

古墳時代に属する集落は、兀（はげ）塚遺跡で後期末と推定される掘立柱建物跡群が確認されているだけで、墳墓と比べて不明な部分が多い。

古墳の築造が終了し、代わって豪族たちは寺院建築を行う。平野中央部では坂田庵寺、平野北西部で勝賀魔寺が知られており、両寺とも川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土しており、白鳳期（飛鳥時代後半）の創建年代が推定されている。

奈良～平安時代にかけては、正箱遺跡・薬王寺遺跡が知られる。6世紀に分かれるが計50棟以上の掘立柱建物跡が見つかり、中には面積が40m²を越す大型のものがある。さらに、区画溝や掘立柱建物跡の中には条里地割と方位が符合するものがあり、南海道に接する当該地域では、早くから条里地割の敷設が進んでいたことがわかる。

鎌倉～室町時代でも、条里地割に符合した溝跡が、香西南西打遺跡や西打遺跡で数多く広範囲に検出されており、条里地割がこの頃には普遍的であったと考えられる。さらに、西打遺跡では東西54m南北40mの範囲で、区画溝に囲まれた鎌倉時代に属する屋敷地が発掘されており、莊園を基盤とした領主層の成長がうかがえる。力を蓄えた領主たちは、武装して武士化し、やがて戦国時代を強力な武士団として活躍していく。

香川郡を拠点として、讃岐各地や備讃瀬戸に支配権をのばしたのが、香西氏である。香西氏は、承久の乱で戦功をあげ、幕府より阿野・香川郡を与えられた氏族で、この香西氏を核として地元の領主が集結して一大勢力を築いた。この香西氏を経済的に支えたのは、『兵庫北関入船納帳』（文安2年（1445））にも記されている香西浦であり、活発な商業活動が行われたのであろう。香西氏は、勝賀山に有事の際の城を築き、常は佐料城を居館とし、その周囲には柳松城・芝山城・鬼無城などの出城を築いた。後には、本拠地を香西浦に近い藤尾城に移し、作山城を築いている。さらに、香西氏に従った地元の領主たちの居城が周囲に点在している。左図では、筑城城や飯田城、片山城が該当し、香川郡や阿野郡を中心に、その数は一説には40余にのぼったという。本書で報告する筑城城跡も、香西氏を支えていた筑城氏の居城である。筑城城跡および飯田城跡周辺には、今でも塚が群集している。埴輪片が出土するものもあり、相作牛塚古墳のように古墳もあると推定されるし、中世の「武将の墓」という言い伝えも残っている。

豊臣秀吉による四国攻撃以後、その家臣である生駒親正が讃岐一国を支配し、高松城を築き、江戸時代に至る。現在の市街地は、この高松城の城下町が発展したものである。やがて、藩主は生駒家から松平家に替わり、明治維新を迎える。正箱遺跡・薬王寺遺跡や鬼無藤井遺跡では、江戸時代の庶民の墓や屋敷跡が発掘されている。

詳細は、各報告書等を参照されたい。

第2図周辺主要遺跡分布図遺跡名一覧

1 柳松城跡	10 西打遺跡	19 空家古墳	28 青木塚群	37 片山城跡
2 芝山城跡	11 鬼無藤井遺跡	20 山野塚古墳	29 紙漉塚群	38 清願寺山古墳群
3 勝賀魔寺	12 今岡古墳	21 鬼無城跡	30 石清尾山9号墳	39 南山浦古墳群
4 藤尾城跡	13 平木古墳群	22 筑城城跡	31 北大塚吉墳	40 片山池1号墳跡
5 作山城跡	14 大塚古墳	23 上臺古墳	32 塚塚古墳	41 坂田庵寺
6 香西南西打遺跡	15 神高池北西古墳	24 相作牛塚古墳	33 石船塚古墳	42 がめ塚古墳
7 勝賀城跡	16 神高池西古墳	25 飯田城跡	34 塚塚古墳	43 正箱遺跡・薬王寺遺跡
8 かしが谷古墳群	17 こめ塚古墳	26 御殿大塚古墳	35 塚塚古墳	44 中間・西井坪遺跡
9 佐料城跡（佐料遺跡）	18 古宮古墳	27 半田・小坂塚群	36 鶴尾神社4号墳	45 児塚遺跡

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と層序

調査前の当該地は、水田として利用されていた。調査対象地は、南北39.2m・東西25.2mの長方形で、面積約1,000m²を測る。そのうち、調査範囲は南北約31m・東西約23mで、面積約713m²となった。

調査区東半では現在の水田耕作層の直下に地山となる「にぶい黄色砂質シルト層」が現れた。この地山面は調査区中ほどから西へ向かって次第に深くなり、西端で現地表下60cmほどになる。この調査区西端では後世の堆積層が計6層確認でき、第5層と第6層の下面から遺構を検出した。しかし、第6層の堆積は調査区の一部にとどまり、それぞれの遺構面を掘り分けることが困難だったため、第6層まで除去した後に、同一遺構面で遺構検出・掘削を行った。検出した遺構を、層位別に分けると次のとおりである。

第5層下面 SD03・05～09, SE01, 柱穴跡

第6層下面 SD01・02・04・10・11・13・14, SX01

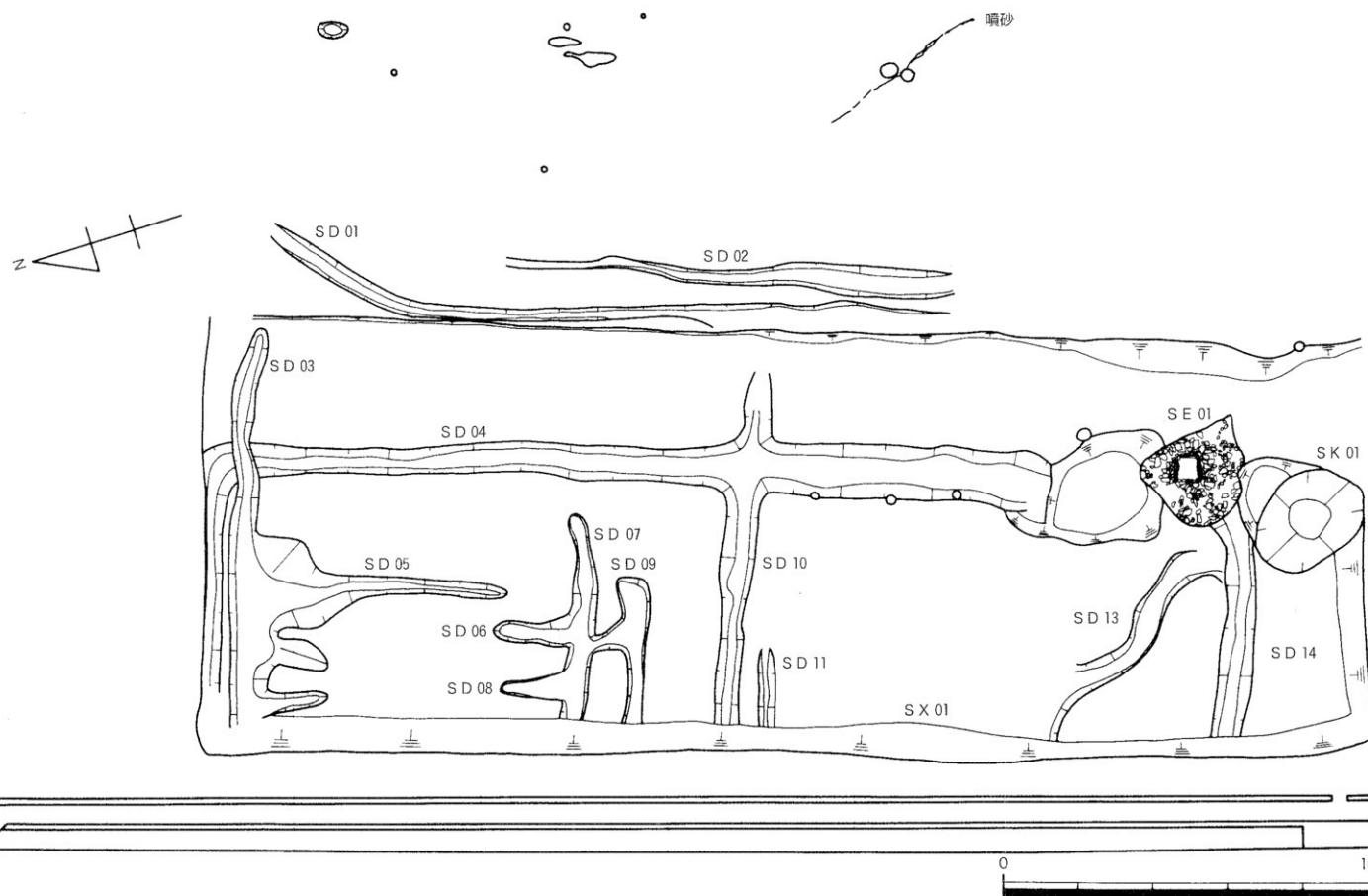
以上の遺構を含め、検出した遺構は、溝跡13条と井戸跡1基、土坑1基、柱穴跡14個そして不明遺構1基である。溝跡は後世の開墾によるものか、上半部が削られていて底部付近しか残っておらず、深さ10cm前後、幅1m弱のものが多い。調査区南端で検出した井戸(SE01)は深さ1mほどしか残っていないなかつたが、その構造は明らかにすらすらできた。つまり、井戸の下半は板材と横木で約60cm四方の正方形に井戸枠を組み、上半は河原石を円形に積み上げて側壁としていたのである。

また、このほかにも柱穴跡の1つを埋没後に引き裂く形で地震の際の液状化現象による噴砂を確認し

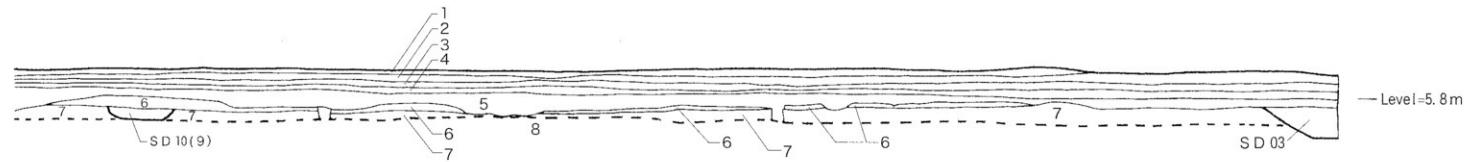
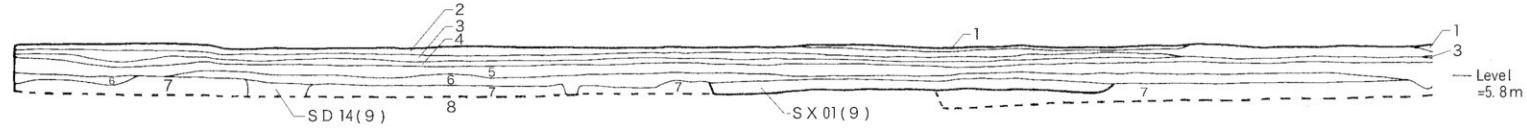
ている。



第3図 噴砂検出状況



第4図 造構配図（縮尺1/100）



土層名

- | | |
|---------------|------------|
| 1 地表上 | |
| 2 灰黄褐色シルト質極細砂 | Hue10YR4/2 |
| 3 灰黄褐色シルト質極細砂 | Hue10YR5/2 |
| 4 灰黄褐色シルト質極細砂 | Hue10YR4/2 |
| 5 暗灰色シルト質極細砂 | Hue10YR5/1 |
| 6 黄褐色シルト質極細砂 | Huc2.5Y5/3 |
| 7 にぶい黄色砂質シルト | Huc2.5Y6/3 |
| 8 にぶい黄色砂質シルト | Huc2.5Y6/4 |
| 9 暗灰黄色シルト質極細砂 | Huc2.5Y5/2 |

第5図 調査区西壁土層図（縮尺1/40）

第2節 遺構と遺物

溝跡13条、井戸跡1基、土坑1基、柱穴跡14個などを検出し、コンテナ5箱分の遺物が出土している。検出した遺構は、どれも後世の削平を受けており、その法量は現存の値を示す。以下、遺構ごとに内容を説明する。

S D 0 1 調査区中央で南北方向にのびる断面U字形の溝である。方位はN-13°-Eだが、北4m分はN-49°-Eにのびる。幅30~60cm、深さ5~18cm、長さ18.5mを測る。埋土は、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂の單一層である。堆上より土師質土器小皿・杯(第6図1・2)が出土している。土師質土器杯の器高は2.5cm以上とSD04出土のものに近く、埋土もSD04と同一であることから、SD01と近い埋没年代が推定できる。

S D 0 2 調査区中央でSD01と平行して南北方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-13°-Eで、幅30~80cm、深さ10~20cm、長さ12mを測る。埋土は、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂の單一層である。埋土より土師質土器杯(第6図3)が出土している。埋土がSD01と同様SD04と同一であり、近い埋没時期が考えられる。

S D 0 3 調査区北側で東西方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-77°-Wで、幅60~70cm、深さ14cm、長さ10.6mを測る。埋土は、褐色(10YR5/1)シルト質極細砂の單一層である。堆上より土師質土器小皿・杯・擂鉢・羽釜・土鍋、束縛系須恵器こね鉢、備前焼壺、中国産青磁碗が出土している(第7図)。

土師質土器小皿(5~7)は、口径8.2~8.4cm、器高1.2~1.4cmを測り、杯(4~8~11)は口径9.2~13.8cm、器高1.6~2.3cmを測る。土師質土器擂鉢(15~16)は、口縁部が丸みを帯び狭くなり、内面御目が3条と少ない。国分寺精井遺跡の例を引用すれば、擂鉢は佐藤編年のⅢ期にあたり、15世紀中葉~16世紀前半と想定できる(佐藤1995)。羽釜(17~18)は、錫の退化が著しく片桐編年のⅢ-7~8期にあたり、16世紀前葉~中葉と想定される(片桐1992)。土鍋(19)は、口縁部に内耳が付くもので、片桐編年のⅢ-6~7期にあたり、16世紀前葉に想定できる。束縛系須恵器こね鉢(14)は、口縁端部を上下に拡張しており、森田編年Ⅲ-2にあたることから14世紀前半と想定できる(森田1995)。中国産青磁碗底部片(12)は、輪が疊付を超えて高台内面途中までかかっている。龍泉窯系と考えられる。

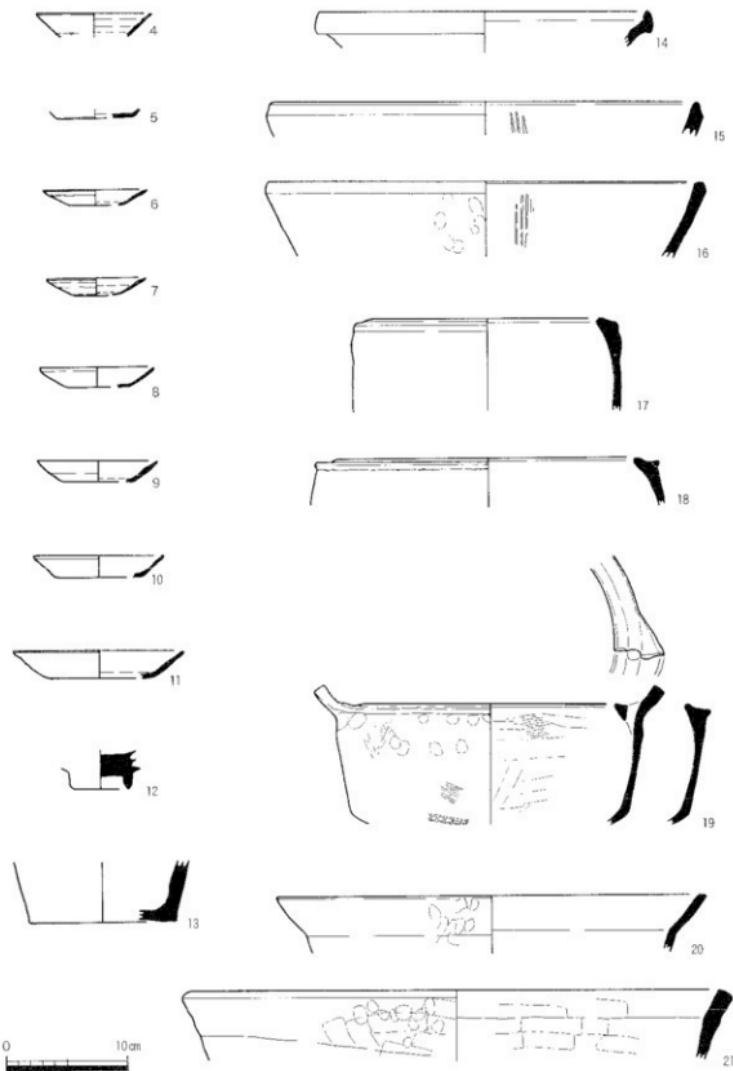
出土遺物を概観すると、束縛系須恵器こね鉢など14世紀代の遺物を少量含むが、これらは古い時期の遺構の遺物が混じったものと考えられる。土師質土器の年代より埋没時期は16世紀前葉~中葉と推定したい。

S D 0 4 調査区中央でSD01・02と平行して南北方向にほぼ直線にのび、調査区北側で西方向にはほぼ90°で折れる断面U字形の溝である。方位は南北方向でN-13°-Eで、幅70~150cm、深さ19~23cm、長さ23.4mを測り、東西方向でN-77°-Wで、深さ8~20cm、長さ6.2mを測る。後述するSD14は、このSD04の延長と考えられる。埋土は、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂の單一層である。埋土より土師質土器小皿・杯・碗・羽釜、須恵質土器碗・壺、備前焼擂鉢、亀山焼壺、中国産青磁碗が出土している(第8図)。

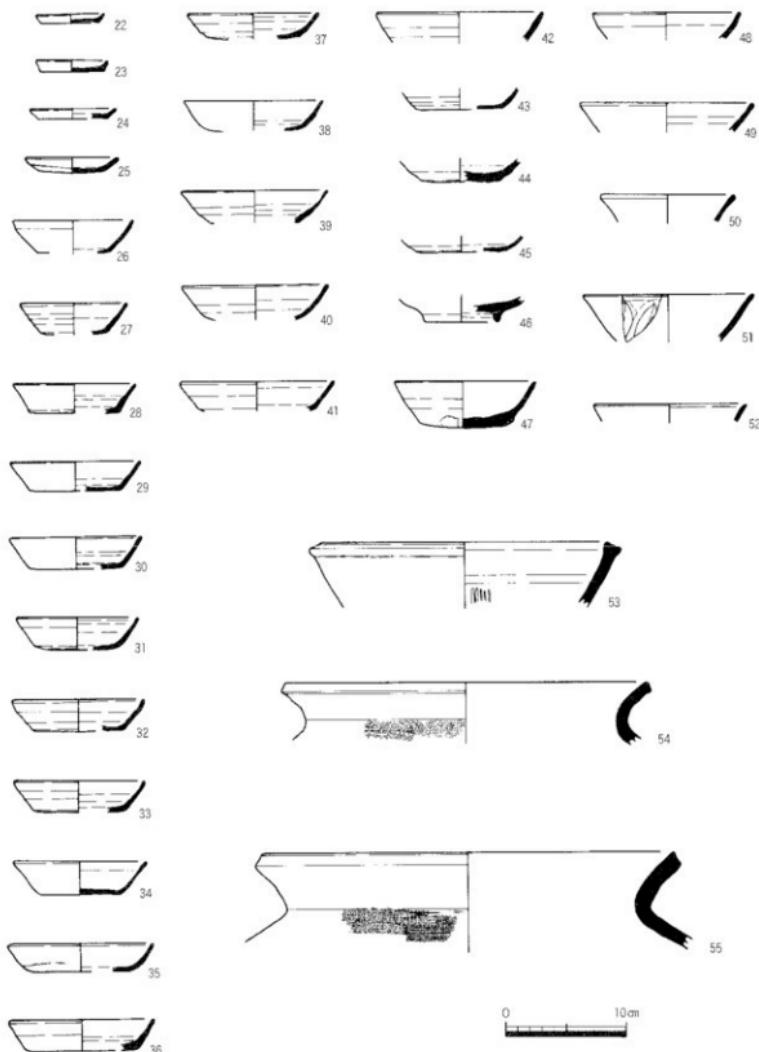
須恵質土器碗(48~49)は、十瓶山窯跡群のものを参考にすれば、回転ヘラミガキも省略され軟質であり、佐藤編年の第IV期第4段階に該当し、13世紀後半と想定できる(佐藤1995)。土師質土器碗(46)



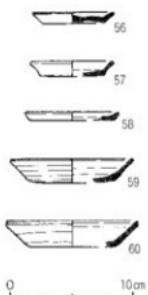
第6図 SD01-02出土遺物実測図



第7図 SD03出土遺物実測図



第8図 SD04出土遺物実測図



第9図 SD10出土遺物実測図

も、高台をもつものが13世紀代まであることから（片桐1992）、須恵質土器碗と近い時期と考えられる。備前焼描鉢（53）は、口縁端部の平坦面を外に傾斜させ、上下にわずかながら拡張している。間壁縦年のⅢ期後半にあたり、14世紀前半と想定される（間壁1966～68・81）。亀山焼甕（54・55）は、体部外面格子目印き、同内面は同心円文を消している。伊藤編年の亀山焼第2群にあたり、13世紀後半と想定される（伊藤1987）。中国産青磁碗（51）は、龍泉窯系で幅の広い片切形の鍋進介をもち上田編年のB-1類に該当し、14世紀初頭頃と想定できる（上田1982）。このように、13世紀後半から14世紀前半の遺物があることから、SD04は13世紀後半頃に掘削され、14世紀前半には埋没したと考えられる。

一方、土師質土器小皿（22～25）は、口径5.8～7.7cm、器高0.7～1.3cmを測り、杯（26～45）は口径8.8～13.6cm、器高2.4～2.8cmを測る。このSD04出土の杯の器高を、SD03のものと比較した場合、高いことがわかる。SD04が13世紀後半～14世紀前半、SD03が16世紀前半の年代が想定できることから、時期が新しくなるに従い器高が低くなる傾向がうかがえる。この傾向は、讃岐の他遺跡出土の土師質土器とも矛盾しない。

S D 0 5 調査区北側で南北方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-13°-Eで、幅30～50cm、深さ8cm、長さ4.2mを測る。埋土は、褐灰色（10YR5/1）シルト質極細砂の單一層である。出土遺物はないが、SD03と埋土が同じことから、SD03と近い時期が考えられる。

S D 0 6 調査区西側で南北方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-15°-Eで、幅30～50cm、深さ5～6cm、長さ3.6mを測る。埋土は、褐灰色（10YR5/1）シルト質極細砂の單一層である。SD07と切合が前後関係は不明。出土遺物はないが、SD03と埋土が同じことから、SD03と近い時期が考えられる。

S D 0 7 調査区西側で東西方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-74°-Wで、幅40～70cm、深さ5～8cm、長さ5.3mを測る。埋土は、褐灰色（10YR5/1）シルト質極細砂の單一層である。SD06・SD08と切合が前後関係は不明。出土遺物はないが、SD03と埋土が同じことから、SD03と近い時期が考えられる。

S D 0 8 調査区西側で南北方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-14°-Eで、幅30～70cm、深さ3～7cm、長さ1.7mを測る。埋土は、褐灰色（10YR5/1）シルト質極細砂の單一層である。SD07と切合が前後関係は不明。出土遺物はないが、SD03と埋土が同じことから、SD03と近い時期が考えられる。

S D 0 9 調査区西側で東西方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-76°-Wで、幅40～70cm、深さ5～7cm、長さ3.7mを測る。埋土は、褐灰色（10YR5/1）シルト質極細砂の單一層である。出土遺物はないが、SD03と埋土が同じことから、SD03と近い時期が考えられる。

S D 1 0 調査区中央でSD04と直交して東西方向にほぼ直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-73°-Wで、幅70～90cm、深さ12～19cm、長さ9.5mを測る。埋土は、暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質極細砂の單一層である。埋土より土師質土器小皿・杯が出土している（第9図）。埋土がSD04と同一であることから、SD04と近い埋没年代が推定できる。

SD11 調査区西側でSD10と平行して東西方向にはば直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-77°-Wで、幅50cm、深さ10cm、長さ2mを測る。埋土は、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂の單一層である。出土遺物はないが、SD01と埋土が同じことから、SD04と近い時期が考えられる。

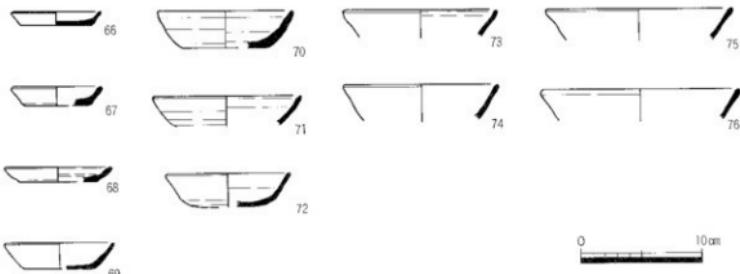
SD12 調査区西側で検出したが、遺構でないことが判明したため除外した。

SD13 調査区南西で、南東から北西にS字状に蛇行する断面U字形の溝である。幅60~80cm、深さ8cm、長さ6.5mを測る。埋土は、暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂の單一層である。埋土より土師質土器小皿・杯、須恵質土器碗が出土している(第10図)。土師質土器杯(62~64)の器高は2.5~2.8cmとSD04出土のものに近い。須恵質土器碗(65)は、SD04出土の48~49と同じく、十瓶山窯跡群の佐藤編年第IV期第4段階に該当し、13世紀後半と想定できる。さらに、SD04と埋土が同じことから、SD04と近い時期が考えられる。

SD14 調査区南西で、東西方向にはば直線にのびる断面U字形の溝である。方位はN-73°-Wで、幅70~90cm、深さ18cm、長さ6mを測る。埋土は、SD04と同じ暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細砂の單一層である。SE01により溝の東端が壊されているが、溝は東端で北にその方向を変えようとしており、本来SD04と同一の溝であったものがSE01により分断されたものと考えられる。埋土より土師質土器小皿・杯、須恵質土器碗が出土している(第11図)。土師質土器小皿(66~68)は、口径7.5~8.8cm、器高1.1~1.5cmを測り、杯(69~72)は口径9.0~12.4cm、器高2.1~3.0cmを測る。須恵質土器碗(73~76)は、SD04出土の48~49と同じく、十瓶山窯跡群の佐藤編年第IV期第4段階に該当し、13世紀後半と考えられる。SD04の延長上の溝であることから、SD04と同じく13世紀後半に掘削され、14世紀前半に埋没したものと推定できる。



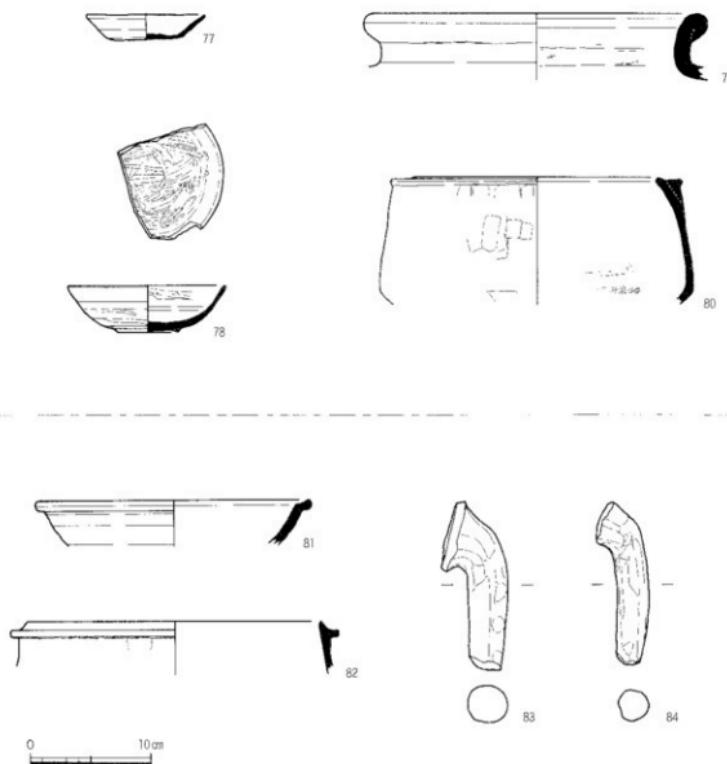
第10図 SD13出土遺物実測図



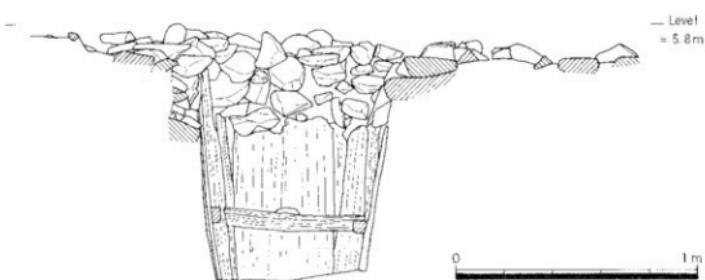
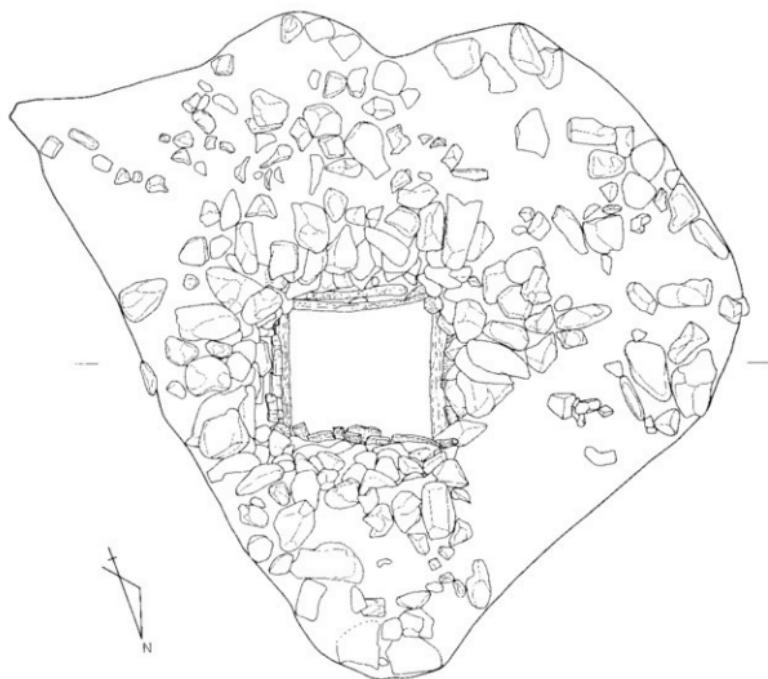
第11図 SD14出土遺物実測図

S E 0 1 調査区南西で検出した井戸で、SD14を壊して掘削されている。井戸は検出面から約1mで底に達し、下半は板材と横木で正方形に井戸枠を組み、上半は河原石を円形に積み上げて側壁としている。井戸枠の内法は、底で東西57cm・南北46cmを測り、上に向うにしたがい南北65cm・東西75cmと広がっている。河原石の側壁も、井戸枠同様に傾斜がついており、検出面で直径約90cmを測る。井戸の掘方は、検出面で東西2m40cm・南北2m70cmの規模をもつ不定形である。この井戸が保存されることになったため、井戸枠・側壁を崩さず、掘方は掘削しなかった。埋土は、褐灰色(10YR5/1)シルト質極細砂の單一層である。

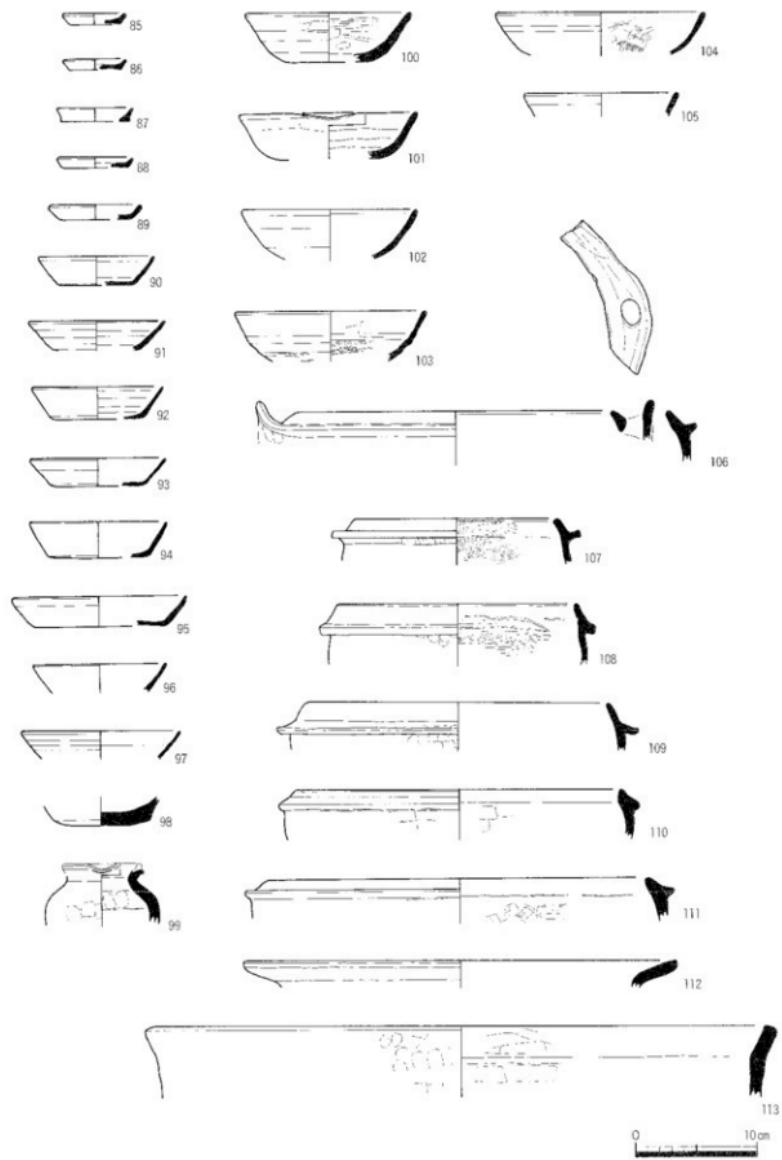
上面精査時に、土師質土器杯・羽釜、瓦器椀、備前焼窯が出土している(第12図)。土師質土器羽釜(80)は、鶴の退化が著しく片桐編年のⅢ-7期にあたり、16世紀前葉と想定される。瓦器椀(78)は、いわゆる和泉型で、口径13cm、器高3.8cmと縮小化が顕著であり、ヘラミガキも省略化が認められる。森島編年のⅣ-1期に該当し、13世紀中頃と想定できる(森島1995)。備前焼窯(79)は、頸部をやや外反させ、口縁端部を折り曲げて玉縁としている。岡壁編年のⅢ期にあたり、13世紀後半から14世紀前半と想定される。



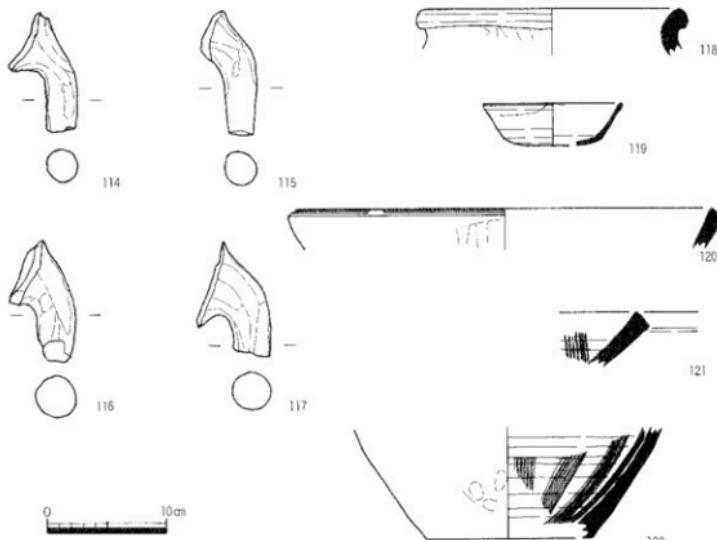
第12図 SE01出土遺物実測図(上段:上面精査時、下段:埋土掘削中)



第13図 SE01平面および断面図（縮尺1/20）



第14図 SE01南西およびSD13・14切合付近出土遺物実測図①



第15図 SE01南西およびSD13・14切合付近出土遺物実測図②

さらに、埋土掘削中に上師質土器羽釜・脚部、瀬戸・美濃系大皿が出土した（第12図）。上師質土器羽釜（82）は、上面精査時出土のものと同様、16世紀前葉と想定される。瀬戸美濃系大皿（81）は、口縁端部を大きく外反させ折線状にしており、藤沢編年の瀬戸・美濃大窯第3段階にあたり、16世紀後半と想定される（藤沢1993）。

以上、SE01出土の遺物を概観すると、古い時期の遺構の遺物が混じっているが、土師質土器羽釜や瀬戸・美濃系大皿より、16世紀代の埋没年代が考えられる。

一方、SE01掘方の南西およびSD13・14が切り合う付近より、まとまって土器が出土している。どの遺構に伴うものかは明らかでないが、列挙すると上師質土器小皿・杯・羽釜・土鍋・脚部・壺、瓦質土器片口壺、須恵質土器椀・杯、東播系須恵器こね鉢、備前焼擂鉢が出土している（第14・15図）。時代は13世紀から16世紀のものが混じっている。

S K 0 1 調査区南端で検出した素掘りの土坑である。平面は不整な楕円形を呈し、直径は東西2m30cm・南北3m20cmで、深さは55cmを測る。埋土は、褐灰色（10YR5/1）シルト質極細砂の単一層である。埋土より土師質土器小皿・杯・土鍋・擂鉢、須恵質土器椀、東播系須恵器こね鉢、中国産青磁碗が出土している（第16図）。

土師質土器擂鉢（130）は、口縁部が丸みを帯び狭くなっており、国分寺楠井遺跡の例を引用すれば佐藤編年のⅢ期にあたり、15世紀中葉～16世紀前半と想定できる。須恵質土器椀（126・127）は、126の高台は粘土紐を張り付けただけであり、十瓶山窯跡群の佐藤編年第IV期第4段階に該当し13世紀後半と考えられ、127は126より高台の成形が丁寧で焼成も硬質であることから、十瓶山窯跡群の佐藤編年第IV期第3段階に該当し13世紀前半と考えられる。東播系須恵器こね鉢（129）は、口縁端部の拉張

がなくなり肥厚させただけであり、森田編年Ⅲ-3に該当することから14世紀後半と想定される。中國產青磁碗（131）は、底部内面に草花文を施すもので、横田・森田編年の龍泉窯系青磁碗1-2に分類でき、12世紀中葉から13世紀初頭を中心とする時期と考えられる（横田・森田1978）。

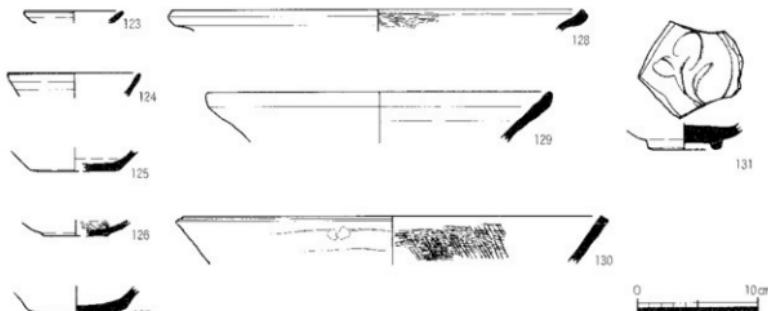
16世紀の遺物が出土しており、SD03・SE01と同じ埋土であることから、16世紀の埋没年代が想定される。

ピット 調査区北東から南西にかけて合計13個のピットを検出した。平面は円形で、直径20~40cm、深さは12~26cmを測る。埋土は、どれも褐色（10YR5/1）シルト質極細砂の單一層である。出土遺物はないが、埋土がSD03と類似することから16世紀を中心とする時期と推測される。このうち、調査区東側で検出したものは、地震によって生じる液状化現象である噴砂によって切られており、このピットが埋没した後に地盤が起こったことを示している。

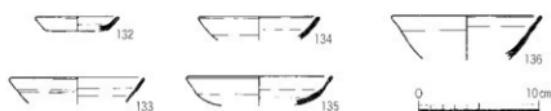
S X 0 1 調査区西端で検出した不明遺構である。遺構状の窓みが見られるが、平面形は明らかにすることができなかった。調査区西壁断面で確認した限りでは、南北幅（長さか？）4m25cm、深さ10cmを測る。埋土は、暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質極細砂の單一層である。埋土より土師質土器小皿・杯、須恵質土器楕が出土している（第17図）。土師質土器杯（133~135）の器高は2.3cm以上とSD04出土のものに近く、須恵質土器楕（136）は、SD04出土の48・49と同じく、十瓶山窯跡群の佐藤編年第IV期第4段階に該当する。埋土もSD04と同一であることから、13世紀後半~14世紀前半の埋没年代が推測される。

その他の出土遺物

遺構に伴うものかどうか不明だが、調査区南西隅において第5層より土師質土器杯・羽釜・土鍋、東播系須恵器こね鉢、土鍤（第18図140・146~149）がまとめて出土している。東播系須恵器こね鉢（146）は、口縁端部の拡張が弱く、森田編年Ⅲ-3に該当することから14世紀後半と想定される。



第16図 SK01出土遺物実測図

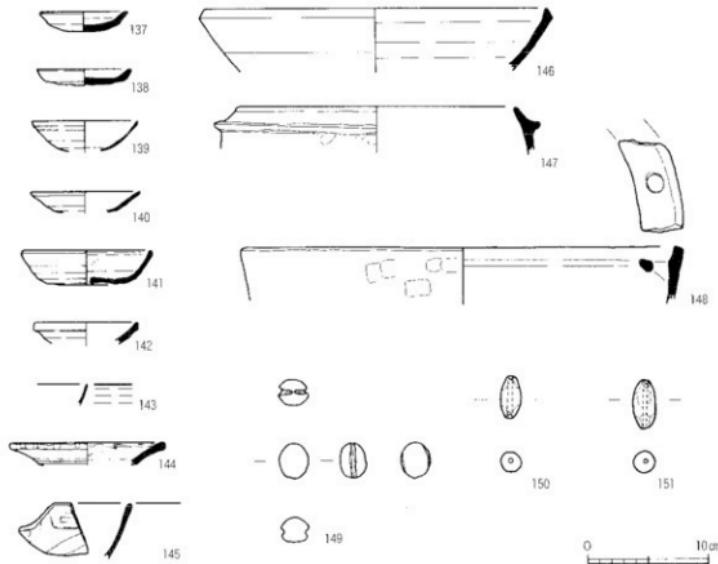


第17図 SX01出土遺物実測図

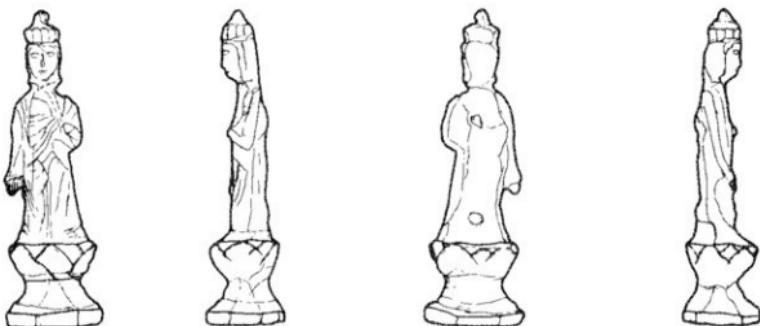
一方、遺構面精査中において、第5～6層より、土師質上器小皿・杯、中国産白磁皿・碗、中国産青磁輪花皿・碗、土鉢（第18図137～139・141～145・150・151）、十一面觀音念持仏、銅錢（第19図）が出土している。中国産白磁皿（142）は、口径8.6cmを測り、口縁端部の断面は三角形を呈する。横田・森田編年の白磁皿II-1・b類に分類され、12世紀前半頃と想定される。中国産青磁碗（145）は、口縁外面に雷文帯を施すもので、上田編年のC-II類に分類され、14世紀後葉～15世紀前葉と想定できる。

十一面觀音念持仏（152）はSD04を被覆する第5～6層から出土した。青銅製で、台座を含めた身丈は6.5cm（2寸）。印は右手を与願印に結び、左手は肘から先を欠損する。頭上に推定11面（確認できるのは7面）の化仏（けぶつ）を頂き、頭頂には如来像らしきものが残る。背面に沿浴の痕跡が見られることから光背を欠損している可能性がある。衣文の線彫り、台座蓮内の整形など相対に精巧で写実的な作風を示す。時期の特定が難しいが、鎌倉時代から室町時代の範疇には収まるものと考えられる。本像は、個人が駒子などに納めて崇拝する念持仏または旅行等の際に携帯する枕本尊として用いられたものと考えられるが、胎内仏の可能性もある。

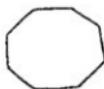
銅錢（153）は、SD04を被覆する第5～6層から出土した。周辺部を欠損し、方孔を中心に直径約2cmほどが残存する。裏面は剥落が激しいものの、表面には政和通宝または宣和通宝の文字が読みとれる。政和、宣和ともに北宋最後の皇帝徽宗治世下の年号で政和通宝が西暦1111年、宣和通宝が1119年の铸造である。



第18図 第5～6層出土遺物実測図①



152



第19図 第5～6層出土遺物実測図②

参考文献

- 伊藤晃1987「棄棄」『岡山県の考古学』吉川弘文館
- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
- 片桐孝浩1992「考察－古代から中世にかけての土器様相－」『川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤龍馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』
- 佐藤龍馬1995「楠井窯土器の編年」『国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 藤沢良祐1993「瀬戸・美濃人窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史編4
- 間堺忠彦・間壁茂子1966～68・84「備前焼研究ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18号
- 森島康雄ほか1995「瓦器総」『概説中世の上器・陶磁器』中世土器研究会編
- 森田稔1995「中世須恵器」『概説中世の上器・陶磁器』中世土器研究会編
- 横田賢次郎・森田勉1978「大字府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

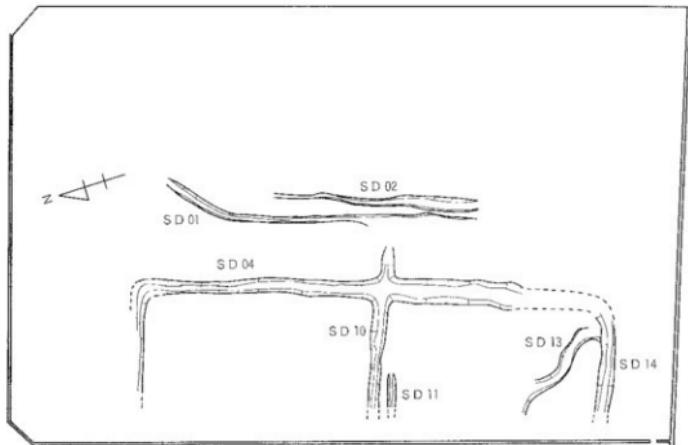
第4章　まとめ

第1節　遺構の変遷

調査区内の遺構は、層位や出土遺物、遺構の切合から2時期に分けることが可能である。

第Ⅰ期は、第6層下面で検出した遺構で、SD01・02・04・10・11・13・14、SX01が該当する。出土遺物から、13世紀後半に掘削され、14世紀前葉に埋没したと推測される。中でも注目される遺構は、SD04・14である。この2本の溝は本来1本のもので、調査区内で「コ」字形に巡っていたが、第Ⅱ期に属するSE01によって南東の隅が破壊されている。SD04・14はさらに調査区外へ西に向かって延びており、この溝が「口」形であったかどうかは確認できなかった。SD04・14の南北の距離は、溝の中心で約27.5mを測るが、これは付近に残る条里地割1町（約109m）の1/4にあたる。SD04・14の傾きは現況の条里地割ともほぼ一致し、13世紀には当該地域にも条里地割が見られたようである。ちなみに、SD04南北溝は香川郡9条18里15・16坪界にあたり、SD04東西溝は香川郡9条18里16坪中線にあたり。さらに、SD10はSD04に直交するだけでなく、SD04・14の南北間のちょうど中央に位置し、SD04・14を南北に折半している。

次にSD04・14の遺構の性格を推測してみたい。土地の四方（調査区内外では三方）を溝で囲む例は、中世においては一般に屋敷地の場合が多い。市内の類例を概観すると、空港跡地遺跡（林町）では、東西約130m・南北約110mを溝で区画した中に建物群や墳墓が配置されており、13世紀代が主体である（香川県1992）。西打遺跡（鬼無町藤井）では東西54m南北40mの範囲で、溝に囲まれた鎌倉時代に属する屋敷地が発掘されている（香川県1997）。しかしながら、当該調査区では溝に囲まれた範囲から柱穴等の住居を示す遺構は確認されなかった。そのため、水田や畑といった生産域の区画溝の可能性



第20図　遺構変遷図（第Ⅰ期）

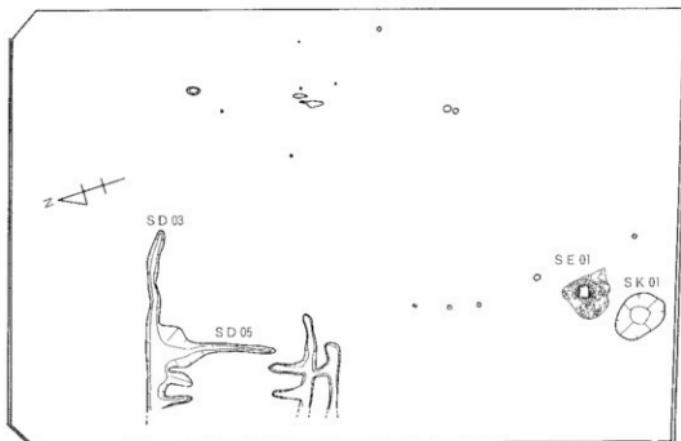
もあるが、当該時期の遺物量が生産域とするには多量であることから、掘立柱建物などの住居群は、調査区外の西側に存在した可能性もある（註1）。

第Ⅱ期は、第5層下面で検出した遺構で、SD03・05～09・12、SE01、柱穴跡が該当する。出土遺物から16世紀代と推定される。SD03は、第Ⅰ期のSD04東西方向の溝と隣接して併走しており、条里地割に沿って掘削されたものである。SE01は、井戸の下部は板材と横木で約60cm四方の正方形に井戸枠を組み、上半は河原石を円形に積み上げており、丁寧に構築されたものである。後述するように筑城城が調査区の北側に存在していたこと、筑城城と同じ16世紀であることを考えると、このSE01は、筑城城に関係する施設の一部と考えられる。

註1）別の考え方では、村落内の小寺院（いわゆる「お堂」）の可能性もある。西打遺跡では、東西22.8m南北13.2mの溝で囲まれた範囲の西寄りに、13世紀代の3間×3間の掘立柱建物跡SB02が確認されており、入口が東面すること、入口が三枚扉を持つこと考えられること、他の掘立柱建物群と隔離して位置することから村落内寺院と推定されている（香川県1998）。一方、当該調査区では、十一面觀音念持仏が出土しており、SD04・14もお堂を囲む溝であった可能性もある。

参考文献

- 財香川県埋蔵文化財調査センター1992『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成3年度』
財香川県埋蔵文化財調査センター1997『高松港頭上地区面整理事業平成8年度埋蔵文化財発掘調査概要 高松城跡（西の丸町）・西打遺跡』
財香川県埋蔵文化財調査センター1998『高松港頭上地区面整理事業平成9年度埋蔵文化財発掘調査概要 西打遺跡・高松城跡（西の丸町）』



第21図 遺構変遷図（第Ⅱ期）

第2節 筑城城について

今回の調査は弦打公民館新築に先立って、中世城館である筑城城に関する遺跡の検出を目指したもので、筑城城と同時期と推定される溝跡や井戸跡を検出した。また、条里に関係すると思われる溝跡や地震の噴砂などは、周辺の開発史、災害史を物語る資料として大きな収穫であった。

一方、遺物量は豊富で、中でも十一面觀音念持仏、輸入銅錢、輸入磁器片などは、一般の集落では出土することがないもので、その上からも調査地点が筑城城に深く関係した場所であった可能性が強まったといえる。

この筑城城について、文献からアプローチした場合、江戸時代末期の『讃岐國名勝図会』には「飯田備中宅跡・飯田衛門宅跡・都築清左衛門宅跡 並びに飯田村にあり 並びに香西氏家土なり」とある。この記述に従えば、飯田村に都築（筑城）清左衛門の屋敷があり、彼は香西氏に従っていたとする。さらに、江戸時代後期の『讃陽古城記』には、「香川郡飯田村城屋舗 飯田主水・飯田右衛門太夫・築城三郎左衛門。右三家者、皆土居構にて小屋舗也」と記されている。『讃岐國名勝図会』同様に、飯田氏と並んで筑城氏の屋敷が飯田村にあることが分かる。ちなみに、筑城城跡は旧鶴市村に属するが、江戸時代においてはしばしば飯田・鶴市・郷東の三村を併せて飯田郷としている。

さて、筑城城の所在地については、「上の門」「下の門」などの地名、城尾神社の位置などから神社を中心としたおよそ方2町の範囲が推定されている（秋山忠1982）。この周辺の地形をさらに詳細に観察してみると、城域の南限とされる弦打小学校北側の水田および宅地は、南北幅約45mで周辺よりも一段低い区画が東西に帯状につながっている。この低い区画は、西では本村集落のはずれで本津川旧河道に流入し、東は調査区北西の水田で北へ曲がって40mほどで途切れている。この低い区画を筑城城の濠跡と見ると、濠の北岸には「上の門」が重なり、同じく北岸の東西線は条里地割に一致する。本津川旧河道の崖をなす本村集落の西境も南北方向の坪界線に一致する。北と東は地形的な変化に乏しいが、城尾神社の位置はやはり東西の坪界線に重なっている。

これらから、筑城城の城域の設定には条里地割が影響しており、城館の推定範囲は本津川を西限として東西1町（109m）、弦打小学校北側を南限にした南北1町ないしは2町と推定することも可能である。

次に、城主であった筑城氏について触れるが、筑城氏が従っていた香西氏につ



第22図 筑城城跡周辺図（秋山忠 1982 を参考に作成）

いて先に触れておきたい。香西氏は、阿野・香川郡を領地として活躍した武将で、勝賀山（鬼無町是竹・中山町）に城を築き、佐料（鬼無町佐料）に居館を置き、全盛期には備讃瀬戸の海上権も握り、笠居郷周辺一族の城約10ヶ所、武将の出城40余があったという。応仁の乱では、香川・奈良・安富氏とともに細川四天王として活躍した。戦国時代には三好氏に属し、のちに長宗我部元親に従ったが、天正13年（1585）豊臣秀吉の四国攻めを最期に滅亡した。

一方、筑城氏については、江戸時代中期の軍記物語『南海通記』に散見することができ、香西氏に従って活躍している。巻十「香西宗心備州児島陣記」では、元亀2年（1571）の香西宗心による備前児島加陽城攻めに参加しており、城持の旗下として「下飯田筑城清左衛門尉」の名があげられている。巻十五「香西伊勢馬場並西光寺表合戦記」は、天正10年（1582）8月に長宗我部元親軍が香西氏を攻めたときの話だが、激戦区であった伊勢馬場合戦（鬼無町足竹）の先方隊として「下飯田筑城清左衛門尉」の名が見られる。巻十七「土佐兵将退去讃州記」では、豊臣秀吉の四国攻めに対して、天正13年5月に香西氏が居城を藤尾城（香西本町）から西長尾城に移す軍議を開いており、参加者の中に「築城清左衛門」の名が見える。香西氏滅亡後、筑城氏の動向ははっきりしないが、天正15年に豊臣秀吉家臣牛駒親正が入部したとき、召し出されて200石を賜ったと伝えている（秋山忠1982、註2）。

註2）寛永16年（1639）の牛駒家分限帳には、筑城氏の名は掲載されておらず、筑城氏が牛駒家に仕えたかどうかは確認できない。

参考文献

- 秋山忠1982『高松市の文化財第7編 古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
梶原藍渠・藤水『讃岐國名勝圖会』（『名勝園会』角川書店1981所収）
片山駒次郎写1846『讃陽古城記』（『香川叢書』香川県教育委員会1941所収）
香西成賓1718『南海通記』（『歴記資料 南海通記 四国平記』歴史図書社1976所収）

第1表 S D01・02出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径底径器高			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
第6図 1	1:師質土器 小皿	6.3	4.4	1.1	体部外面 ナデ 底部外面 ヘラ切り 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂 石英、角閃石を含む	
	2 土師質土器 杯	11.0		(2.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 微砂粒を含む	
3	3 土師質土器 杯			(2.1)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	微砂 微砂粒を含む (角閃石)	

第2表 S D03出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm) 口径底径器高			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
第7図 4	上師質土器 杯	9.4		(1.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:明赤褐色2.5Y5/8 内面:にぶい橙 7.5Y7/4	微~細砂	
	5 土師質土器 小皿		6.2	(0.7)	体部外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外面:にぶい橙 7.5YR7/3 内面:灰白7.5YR8/2	微~細砂 角閃石の微砂粒	
6	6 土師質土器 小皿	8.4	4.2	1.2	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	微~細砂	
	7 土師質土器 小皿	8.2	3.2	1.4	体部外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	微~細砂 長石、角閃石の微砂粒を含む	
8	8 上師質土器 杯	9.2	5.0	1.6	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	微~細砂	
	9 土師質土器 杯	9.8	5.8	1.7	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 2mm以下の石英、 長石を含む	
10	10 土師質土器 杯	10.4	7.0	1.8	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	微~細砂 1mm以下の石英、 長石を含む	
	11 土師質土器 杯	13.8	8.4	2.3	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR7/6	微~細砂 1mm以下の長石、 角閃石を含む	
12	12 中国産青磁 碗		4.4	(3.1)	外面 ナデ 内面 ナデ	素地:淡橙5YR8/3 釉:にぶい褐7.5YR5/4	龍泉窯系 密	内外面施釉
	13 備前焼壺		12.0	(4.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:赤灰2.5YR4/1 内面:赤褐2.5YR5/3	細~粗砂 5mm以下の細礫 を含む	
14	14 東播系須恵 器 こね鉢	26.6		(3.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
	15 土師質土器 擂鉢	34.8		(2.6)	外面 ナデ 内面 ナデ, 3条横目	外面:黒N2/ 内面:黒N2/	細~粗砂 2mm以下の石英、 長石を含む	

揮岡 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第7図 16	土師質土器 擂鉢	35.4		(6.1)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ、4条捺目	外面：暗灰N3/ 内面：暗灰N3/	細～粗砂 2mm以下の石英、長石を含む	
17	土師質土器 羽釜	18.8		(7.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：黒褐2.5Y3/1 内面：灰白N7/	細～粗砂 1mm以下の石英、長石を含む	
18	土師質土器 羽釜	24.2		(3.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：にぶい黄橙 10YR7/2 内面：灰黄2.5Y6/2	細～粗砂 2mm以下の細繙を含む	
19	土師質土器 土釜	28.8		(11.4)	外面 ナデ、指頭圧痕 底部外面 格子目タタキ 内面 ナデ	外面：赤灰 2.5YR4/1 内面：赤灰 2.5YR5/1	細～粗砂 1mm以下の石英、長石、角閃石を多量に媒付着含む	
20	土師質土器 土鍋	35.0		(4.6)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ	外面：黒褐 7.5YR3/1 内面：黒褐7.5Y3/1	細～粗砂 4mm以下の長石を含む	
21	土師質土器 土鍋	43.0		(5.6)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ	外面：浅黄橙 10YR8/3 内面：浅黄橙 10YR8/4	細～粗砂 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む	外面媒付着

第3表 S D04出土遺物観察表

揮岡 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第8図 22	土師質土器 小皿	5.8	4.8	0.7	外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外面：灰白10YR8/2 内面：灰白10YR8/2	細～粗砂 1mm以下の石英を含む	
23	土師質土器 小皿	5.8	5.3	0.9	外面 ナデ 底部外面 ヘラ切り木調整 内面 ナデ	外面：灰白2.5Y8/1 内面：灰白2.5Y8/1	微～細砂 石英、長石、角閃石を含む	
24	土師質土器 小皿	7.2	5.8	0.8	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白2.5Y7/1 内面：灰白2.5Y7/1	微砂 長石、角閃石を含む	
25	土師質土器 小皿	7.7	5.3	1.3	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白2.5Y8/2 内面：灰白2.5Y8/1	微砂粒を含む	
26	土師質土器 杯	10.0	6.0	2.7	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白10YR8/2 内面：灰白10YR8/2	微砂 石英、長石を含む	
27	土師質土器 杯	8.8	6.6	2.6	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：淡橙5YR8/3 内面：灰白 7.5YR8/2	微～細砂 石英、長石、角閃石を含む	
28	土師質土器 杯	10.2	7.0	2.4	外面 磨滅の為調整不明 内面 磨滅の為調整不明	外面：灰白2.5Y8/1 内面：灰白2.5Y8/1	微～細砂 長石、角閃石を含む	
29	土師質土器 杯	10.8	7.4	2.4	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白2.5Y8/1 内面：灰白2.5Y8/1	微砂 長石、角閃石を含む	
30	土師質土器 杯	11.0	7.6	2.6	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白2.5Y8/1 内面：灰白2.5Y8/1	微砂 石英、長石、角閃石を含む	

挿図 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第8図 31	土師質土器 杯	10.2	6.0	2.8	外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 後ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	微~細砂	
32	土師質土器 杯	11.0	7.8	2.5	外面 ナデ 底部外面 同軸ヘラ切り 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	微砂 長石, 角閃石を含む	
33	土師質土器 杯	10.8	6.8	2.6	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	微~細砂 長石, 角閃石を含む	
34	土師質土器 杯	11.0	6.4	2.7	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂 石英, 角閃石を含む	
35	土師質土器 杯	12.0	8.0	2.3	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	微砂	
36	土師質土器 杯	12.0	8.4	2.6	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白7.5YR8/2	微~細砂 長石, 角閃石を含む	
37	土師質土器 杯	10.8	5.6	(2.1)	外面 磨滅の為調整不明 内面 磨滅の為調整不明	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微砂 長石, 角閃石を含む	
38	土師質土器 杯	11.4	6.4	2.4	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	微砂 石英, 長石を含む	
39	土師質土器 杯	12.0		(2.6)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂	
40	土師質土器 杯	12.0		(2.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂 長石, 角閃石を含む	
41	土師質土器 杯	12.6		(2.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	微砂 長石, 角閃石を含む	
42	土師質土器 杯	13.6		(2.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	微砂 長石, 石英, 角閃石を含む	
43	土師質土器 杯		7.0	(1.7)	外面 ナデ 内面 ナデ 底部外面 ヘラ切り	外面:灰白7.5YR8/2 内面:灰白10YR8/1	微砂 長石, 角閃石を含む	
44	土師質土器 杯		6.6	(1.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂 長石, 石英, 角閃石を含む	
45	土師質土器 杯		7.4	(1.3)	外面 ナデ 内面 ナデ 底部外面 ヘラ切り	外面:灰白7.5YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 長石, 石英, 角閃石を含む	
46	土師質土器 碗		6.0	(2.0)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂 長石, 石英, 角閃石を含む	

揮団 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第8回 47	土師質土器 杯	11.5	7.7	3.8	外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	微砂	接合痕
48	須恵質土器 椀	12.2	(2.2)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰白N7/1	密	
49	須恵質土器 椀	14.2	(2.4)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	
50	須恵質土器 壺	11.0	(2.2)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:褐灰7.5YR5/1 内面:褐灰7.5YR5/1	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
51	中国産青磁 碗	14.0	(3.8)		外面 ナデ、錫邊弁 内面 ナデ	素地:灰白N8/ 釉:灰オリーブ 2.5GY5/2	精良	龍泉窯系 内外面施釉
52	磁器 碗	12.4	(1.5)		外面 ナデ 内面 ナデ	素地:灰白N8/ 釉:灰白10YR7/1	精良	内外面施釉
53	備前焼 擂鉢	23.4	(5.4)		外面 ナデ 内面 ナデ, 条溝現状5溝	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	細~粗砂 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む	
54	龜山焼 壺	31.8	(5.1)		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 格子目タタキ 内面 ナデ	外面:暗灰N3/ 内面:暗灰N3/	密	
55	龜山焼 壺	34.0	(8.0)		口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 格子目タタキ 内面 ナデ	外面:暗灰N3/ 内面:暗灰N3/	密 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む	

第4表 S D10出土遺物観察表

揮団 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第9回 56	土師質土器 小皿	6.5	5.0	0.9	外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外面:灰白7.5YR8/2 内面:浅黄橙7.5YR8/4	細~粗砂 石英、長石、角閃石を含む	
57	土師質土器 小皿	6.6	5.2	1.2	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 長石、角閃石を含む	
58	土師質土器 小皿	7.4	6.8	0.7	外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	微~細砂 長石、角閃石を含む	
59	土師質土器 杯	9.6	6.8	1.9	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	微~細砂 長石、角閃石を含む	
60	土師質土器 杯	10.6	6.8	2.1	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微砂	

第5表 SD13出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第10回 61	土師質土器 小皿	7.2	5.4	1.0	体部外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 内面 ナデ	外部:灰白7.5Y8/1 内面:にぶい橙 7.5YP7/4	細~粗砂 石英、長石を含む	
62	土師質土器 杯	11.4	7.6	2.5	体部外面 ナデ 底部外面 手持ちヘラ切り、回転ナデ 内面 ナデ	外部:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微~細砂	
63	土師質土器 杯	13.0		(2.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微砂	
64	土師質土器 杯	12.3		(2.8)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微砂	
65	須恵質土器 椀	14.0		(2.6)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	微砂	

第6表 SD14出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第11回 66	土師質土器 小皿	7.5	5.8	1.1	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:にぶい橙5YR6/4 内面:にぶい橙5YR7/4	微砂	
67	土師質土器 小皿	7.2	5.8	1.5	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂 石英、長石を含む	
68	土師質土器 小皿	8.8	6.4	1.2	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	細~粗砂 石英、長石、角閃石を含む	
69	土師質土器 杯	9.0	5.8	2.1	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
70	土師質土器 杯	11.2	7.4	3.0	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白7.5YR8/1 内面:淡橙5YR8/4	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
71	土師質土器 杯	12.4		(2.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂	
72	土師質土器 杯	10.2	6.2	2.7	体部外面 ナデ 底部外面 回転ヘラ切り 後ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂	

押図 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第11回 73	須恵質土器 椀	12.4		(2.2)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰 N4/ 内面:灰白 N7/	微砂	口縁部 黒斑
74	須恵質土器 椀	12.6		(2.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白 N8/ 内面:灰白 N8/	密	口縁部 重ね焼きによる黒斑
75	須恵質土器 椀	15.4		(2.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	微砂	口縁部外向 黒斑
76	須恵質土器 椀	16.2		(2.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白 N8/ 内面:灰白 N8/	微砂 長石、角閃石を含む	

第7表 SE01出土遺物観察表（上面精査時）

押図 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第12回 77	土師質土器 皿	9.7	4.6	2.0	体部外向 ナデ 底部外面 ハラ切り後ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微～細砂 石英、長石、角閃石を含む	
78	瓦器椀	13.0	5.0	3.8	外面 ナデ ハラミガキ 口縁部内部 ナデ 体部内部 ハラミガキ 底部内部 ハラミガキ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	密 2mm以下の長和泉型 石を含む	
79	備前焼 甕	26.4		(5.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰 N6/ 内面:灰 N6/	粗～粗砂 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む	
80	土師質土器 羽釜	20.0		(10.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:褐灰10YR4/1 内面:褐灰10YR6/1	微～粗砂 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む 外側煤付着	

第8表 SE01出土遺物観察表（埋土掘削中）

押図 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第12回 81	中国産青磁 鉢	22.4		(3.7)	外面 ナデ 内面 ナデ	素地:灰白10Y7/1 釉:灰白10Y7/1	密	内外面施釉
82	土師質土器 羽釜	24.0		(4.3)	口縁部外面 ナデ 体部外面 板ナデ 内面 ナデ	外面:灰白5Y7/2 内面:灰白5Y7/2	細～粗砂 石英、長石、角閃石を含む	
83	土師質土器 脚部	11.8	3.3	3.1	外面 ナデ、指頭圧痕	外面:にぶい黄澄 10YR7/2	繩～粗砂 3mm以下の石英、長石を含む	
84	土師質土器 脚部	12.8	2.5	2.5	外面 ナデ	外面:にぶい黄澄 10YR7/2	繩～粗砂 2mm以下の石英、長石を含む	

第9表 S E01南西およびS D13・14切合付近出土遺物観察表

擇団 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第14回 85	土師質土器 小皿	5.0	4.0	0.9	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	細砂 微砂粒を多量に含む	
86	土師質土器 小皿	5.0	4.2	0.9	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂 微砂粒を少量含む	
87	土師質土器 小皿	6.2	5.6	1.1	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 微砂粒を少量含む	
88	土師質土器 小皿	6.2	5.4	0.8	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:浅黄橙10YR8/3	微~細砂 微砂粒を少量含む (石英、長石、角閃石)	
89	土師質土器 小皿	7.2	5.6	1.2	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
90	土師質土器 杯	9.4	6.4	2.3	外面 ナデ 底部外面 回転糸切り 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂 微砂粒を少量含む (長石、角閃石)	
91	土師質土器 杯	11.0		(2.4)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
92	土師質土器 杯	10.6	7.4	2.6	外面 ナデ 底部外面 ヘラ切り 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微砂 微砂粒を少量含む (長石、角閃石)	
93	土師質土器 杯	11.0	7.4	2.2	外面 ナデ 底部外面 ヘラ切り 内面 ナデ	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白7.5Y8/1	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
94	土師質土器 杯	11.0	8.2	2.9	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂	
95	土師質土器 杯	14.0	5.4	2.4	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	微砂 長石、角閃石を含む	
96	土師質土器 杯	10.8		(2.3)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/4	微~細砂 石英、長石、角閃石を含む	
97	土師質土器 杯	12.8		(2.3)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白7.5YR8/2 内面:灰白10YR8/2	微砂 微砂粒を含む(長石、角閃石)	
98	土師質土器 杯	7.9		(2.3)	外面 磨滅の為調整不明 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白10YR8/2	微砂 長石、角閃石を含む	
99	土師質土器 片口壺			(4.6)	体部外面 板ナデ 体部内面 指ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
100	土師質土器 杯	13.4	7.0	4.0	外面 ナデ 底部外面 ヘラ切り 内面 ヘラミガキ、ナデ、指頭圧痕	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰白2.5Y7/1	微砂 石英、長石、角閃石を含む	

拂団 番号	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径				
第14回 101	上師質土器 杯	14.4	(3.7)	外面 ナデ	外面:灰白2.5Y7/1	微砂	内面接合
				内面 ナデ	内面:灰白2.5Y7/1 長石, 角閃石を含む 痕明瞭		
102	須恵質土器 椀	14.0	(4.0)	外面 ナデ	外面:灰白 N8/	微砂	口縁部内外面 黒色
				内面 ナデ	内面:灰白 N8/		
103	須恵質土器 椀	15.4	(4.0)	外面 ナデ 体部外面 ヘラミガキ	外面:灰白 N7/	密	口縁部内外面
				内面 ナデ 体部内面 ヘラミガキ	内面:灰白 N7/ 1mm 以下の長石 を含む	黒色	
104	須恵質土器 椀	16.8	(3.6)	外面 ナデ	外面:灰白 N8/	微砂	口縁部内外面
				内面 ハケ目	内面:灰白 N8/ 長石, 角閃石を含む 黒色		
105	須恵質土器 椀	12.2	(2.0)	外面 ナデ	外面:灰白 N8/	微~細砂	口縁部内外面
				内面 ナデ	内面:灰白 N8/ 1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	黒色	
106	上師質土器 羽釜	32.2	(4.0)	外面 ナデ	外面:にぶい黄澄	細~粗砂	口縁部内外面
				内面 ナデ	10YR7/2 内面:灰白10YR8/2 長石, 角閃石を含む	石英, 長石, 角閃 石を含む	内外面煤付着
107	上師質土器 羽釜	16.0	(3.7)	口縁部 ヨコナデ	外面:灰白2.5Y8/1	微~細砂	体部外面
				体部外面 ナデ 内面 ハケ目	内面:灰白2.5Y8/1 石英, 長石, 角閃 石を含む	石英, 長石, 角閃 石を含む	煤付着
108	土師質土器 羽釜	19.2	(5.0)	外面 ナデ	外面:にぶい黄澄	細~粗砂	口縁部外面
				体部外面 指頭圧痕 内面 ナデ	10YR7/2 内面:灰黄2.5Y7/2 長石, 角閃石を含む	1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	外面煤付着
109	上師質土器 羽釜	24.4	(3.9)	外面 ナデ	外面:灰黄褐10YR6/2	細~粗砂	口縁部外面
				体部外面 指頭圧痕 内面 ナデ	内面:灰黄褐10YR6/2 1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	外向煤付着
110	土師質土器 羽釜	26.4	(4.0)	外面 ナデ	外面:灰白7.5YR8/2	細~粗砂	口縁部外面
				内面 ナデ	内面:浅黄澄7.5YR8/2 2mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	2mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	外向煤付着
111	土師質土器 羽釜	30.8	(3.6)	外面 ナデ	外面:にぶい黄澄	粗~細礫	口縁部外面
				内面 ナデ	10YR7/2 内面:にぶい黄澄 10YR7/2 2mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	2mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	外向煤付着
112	上師質土器 土鍋	35.0	(2.2)	外面 ナデ	外面:灰黄褐10YR6/2	細砂	口縁部外面
				内面 ナデ	内面:灰黄褐10YR6/2 1mm 以下の長石, 角 閃石を含む	1mm 以下の長石, 角 閃石を含む	外向煤付着
113	上師質土器 土鍋	49.8	(5.7)	外面 ナデ, 指頭圧痕	外面:灰黄褐10YR5/2	細~粗砂	口縁部外面
				内面 ナデ	内面:灰黄褐10YR6/2 1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む	外向煤付着
第15回 114	土師質土器 脚部		(9.8)	外面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1	細~粗砂	口縁部外面
					2mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む		
115	土師質土器 脚部		(10.3)	外面 ナデ	外面:灰白10YR7/1	細~粗砂	口縁部外面
					1mm 以下の長石, 角 閃石を多量に含む		
116	土師質土器 脚部		(9.9)	外面 ナデ	外面:にぶい黄澄 10YR7/2	細~粗砂	口縁部外面
					1mm 以下の石英, 長 石, 角閃石を含む		

括図番号	器種	法量(cm) 口径底径器高			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
第15回 117	土師質土器 脚部		(9.4)	外面 ナデ	外面：にぶい黄橙 10YR7/2	細～粗砂 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む		
118	土師質土器 甕	20.8	(3.8)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：にぶい黄橙 10YR7/3 内面：にぶい黄橙 10YR7/3	微～粗砂 微砂粒を多量に含む (長石、角閃石)		
119	須恵器 杯	11.2	6.6	3.4	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰N6/ 内面：灰N6/	齊 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む	
120	須恵器 鉢	34.0	(3.2)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白2.5Y8/2 内面：灰白2.5Y8/1	微砂 微砂粒を少量含む(石英、長石、角閃石)		
121	備前焼 擂鉢		(4.4)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	外面：灰褐5YR5/2 内面：にぶい黄橙 現状7条の擂目	細～粗砂 1mm以下の石英、長石、角閃石を少量含む		
122	備前焼 擂鉢		13.6 (9.0)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ、4条の擂目	外面：黄灰2.5Y5/1 内面：黄灰2.5Y5/1	細～粗砂 1mm以下の長石、角閃石を含む		

第10表 SK01出土遺物観察表

括図番号	器種	法量(cm) 口径底径器高			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
第16回 123	土師質土器 小皿	8.2	(0.9)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白5Y8/1 内面：灰白5Y8/1	微砂 微砂粒を含む(長石、角閃石)		
124	土師質土器 杯	10.8	(2.0)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白5Y8/1 内面：灰白5Y8/1	微砂 微砂粒を少量含む(長石、角閃石)		
125	土師質土器 杯		7.4 (1.7)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：褐灰10YR6/1 内面：灰白10YR7/1	微砂 微砂粒を少量含む(長石、角閃石)		
126	須恵質土器 椀		5.2 (1.3)	体部外面 ナデ 内面 ハケ目	外面：灰白N8/ 内面：灰白N8/	微砂 微砂粒を含む(石英、長石、角閃石)		
127	須恵質土器 椀		5.0 (2.6)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰白N7/ 内面：灰白N7/	微砂 微砂粒を含む(石英、長石、角閃石)	底部外面 微砂粒を含む(石英、長石、角閃石)り	
128	土師質土器 土鍋	33.4	(1.7)	外面 ナデ 内面 刷毛	外面：褐灰10YR4/1 内面：褐灰10YR5/1	微～細砂 2mm以下の石英、長石、角閃石を少量含む		
129	東播系須恵器 こね鉢	28.0	(4.2)	外面 ナデ 内面 ナデ	外面：灰N5/ 内面：灰N5/	微～細砂 長石、角閃石を含む		
130	土師質土器 擂鉢	34.4	(3.9)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ、刷毛	外面：にぶい黄橙 10YR7/2 内面：にぶい黄橙 10YR7/2	細～粗砂 1mm以下の長石、角閃石を多量に含む		
131	中国産青磁 碗		6.0 (2.1)	外面 ナデ 内面 ナデ	素地：灰7.5Y6/1 釉：灰オリーブ 7.5Y6/2	精良	龍泉窯系 内外面施釉	

第11表 SX01出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第17回 132	土師質土器 小皿	6.8	5.2	1.2	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	微砂	
133	土師質土器 杯	11.0	(2.1)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:浅黄橙7.5YR8/3	微砂 石英、砂粒を少量含む	
134	土師質土器 杯	9.8	(1.9)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白7.5YR8/2 内面:にぶい榄 7.5YR7/3	微砂	
135	土師質土器 杯	11.8	(2.3)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	微砂 1mm以下の石英を含む	
136	須恵質土器 椀	12.4	(3.6)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白N7/0 内面:灰白N7/0	密	

第12表 第5~6層出土遺物観察表

挿図番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第18回 137	土師質土器 小皿	7.3	(1.6)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	微砂	
138	土師質土器 小皿	7.6	(1.3)		外面 ナデ 底部外面 回転ヘラケズ リ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:浅黄橙10YR8/3	粗~細潔 3mm以下の石英、 長石を含む	
139	土師質土器 杯	8.6	(2.5)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	微砂	
140	土師質土器 杯	9.0	(1.7)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白10YR8/2	微~細砂 1mm以下の角閃 石を含む	
141	土師質土器 杯	10.6	4.8	2.8	外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	細~粗砂 1mm以下の石英、 角閃石を含む	
142	中国産白磁 碗	8.6	(1.8)		外面 ナデ 内面 ナデ	素地:灰白10Y8/1 釉:灰白10Y8/1		内外面施 釉
143	中国産白磁 碗		(1.8)		外面 ナデ 内面 ナデ	素地:灰白7.5Y8/1 釉:灰白7.5Y8/1	密	内外面施 釉
144	中国産青磁 輪花皿	12.8	(1.8)		外面 ナデ 内面 ナデ	素地:灰白N8/ 釉:オリーブ灰 2.5GY5/1	精密	内外面施 釉
145	中国産青磁 碗		(4.5)		外面 ナデ 内面 ナデ	素地:灰白N8/ 釉:オリーブ灰 5GY6/1	精良	内外面施 釉
146	須恵器 こね鉢	28.0	(5.2)		外面 ナデ 内面 ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰N6/	密	

捕団 番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
第18団 147	土師質土器 羽釜	22.4		(3.7)	外面 ナデ, 指頭圧痕 内面 ナデ	外面: にぶい黄橙 10YR7/3 内面: にぶい黄橙 10YR7/3	微~細砂 0.2mm以下の石英, 長石を含む	
148	土師質土器 土鍋	35.2		(4.7)	外面 板ナデ 内面 ナデ 口縁 円孔	外面: にぶい黄橙 10YR7/2 内面: にぶい黄橙 10YR7/2	細~粗砂 石英, 長石, 角閃石を含む	体部外面 煤付着
149	土師質土器 土錘	長 2.8	幅 2.4	厚 2.0	外面 ナデ, 指頭圧痕	外面: 灰黄2.5Y7/2	微~細砂 砂粒を少量含む	
150	土師質土器 土錘	長 3.5	幅 1.7	厚 1.6	外面 ナデ, 指頭圧痕	外面: 橙5YR6/6	微砂	
151	土師質土器 土錘	長 4.0	幅 1.8	厚 1.8	外面 ナデ, 指頭圧痕	外面: 灰白5YR8/2 内面: 灰白5YR8/2	微砂	

写 真 図 版

図版 1



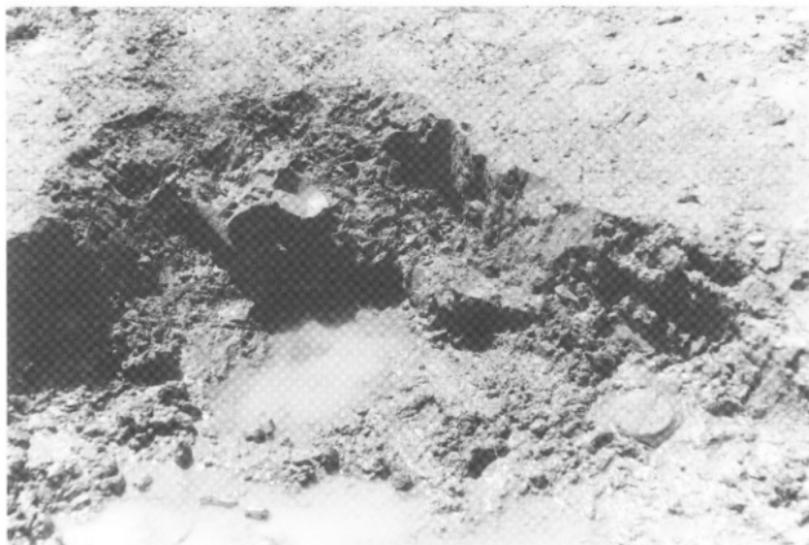
1 調査前全景



2 調査区西壁土層堆積状況 (SD14付近)



1 調査区全景（南から）



2 SD04遺物出土状況

図版 3



1 SE01全景



2 SE01井戸枠検出状況



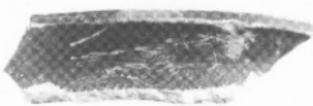
1



51



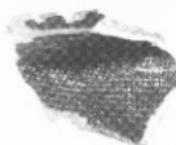
23



55



24



54



25



77



34



153

土師質土器小皿 (1・23～25)・杯 (34・77), 中国産青磁碗 (51), 龜山燒甕 (54・55), 銅錢 (153)



前



左



後



右

報告書抄録

ふりがな	つづきじょうあと
書名	筑城城跡
副書名	高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第43集
編集者名	川畠 聰
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636
発行年月日	平成11年10月

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
つづきじょうあと 筑城城跡	なかしまこう 高松市	37201	34°	134°	H 9.7.8	713m ²	高松市立
	つるいちょう 鶴市町		19'	0'	~		弦打公民
	356番地3		30"	15"	H 9.8.15		館改築

所取遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
筑城城跡	城館	鎌倉時代	方形区画溝	上師質土器	
		室町時代	井戸	須恵質土器 中国産陶磁器 十一面觀音念持仏 銅鏡	

筑城城跡

高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

編集・発行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

発 行 日 平成11年10月

印 刷 株式会社 美巧社